

「満洲開拓」における北海道農業の役割

札幌大学総合研究 第2号 (2011年3月)

〈講演〉

「満洲開拓」における北海道農業の役割

白木沢 旭児

はじめに

ご紹介頂きました白木沢と申します。本日、授業だとすればもう少し内容を絞ってお話をするのですが、講演であれば詰め込んでたくさんお話をします。資料は多めに用意しているのですが、紹介しきれない部分もありますが、持ち帰って時間があれば読んでみてください。

タイトルは「『満洲開拓』における北海道農業の役割」であります。満洲開拓という言葉、最初にイメージを持って頂きたいのですが、戦前、昭和の時代に日本が満洲国を作ります。満洲国には広大な土地があり、日本は非常に土地が狭いので、満洲に農民を移民させ、その土地を日本人農民の手で開拓していく、それが満洲開拓・移民の政策でした。北海道農業の役割とありますが、先述したように日本の農家は土地が狭いので、土地を求めて満洲に移民していったと大抵の事典等では説明されています。そうすると、北海道の農家は例外的に当時の日本でも面積が非常に大きい、もともと土地が広がった北海道の農家が、わざわざ満洲に移民し、満洲に土地を求め農業を営むことは常識であり考えられない。これまでも日本史の様々な本の中で、北海道から満洲に移民をしたことはあまり触れられていませんでした。ところが、たまたま縁があって北海道と満洲との関わりを調べる共同研究に参加してみて、非常に関わりが深いことが分かりました。

レジュメの「はじめに」をご覧ください。玉真之介による北海道農法導入過程の研究とあります。北海道の農家がなぜ満洲に行かなければならないのか。北海道は土地が狭いから土地を求めて行ったのではなく、北海道農法を満洲の日本人移民たちに伝えるために移民した、というのが一番大きな理由でした。そのことを最初に明らかにしたのが玉真之介という学者です。北海道農法とは何かというと、プラウ（鋤）とハローなどの畜力用農具によって耕すこと、そして、有畜農業、家畜を使う農業だそうです。何が特徴かということ、特に北海道で使われているプラウは巨大なもので、人間には牽けない。馬が2頭ほどで牽きます。広辞苑による説明では、牛馬に牽かせて鋤先で地中を切り進み、ヘラで土塊を反

転・破碎する工具とあります。土をひっくり返し、耕す。畑の土を深くひっくり返すので、雑草の種や根が取れるそうです。プラウを使うことで土を反転させ、雑草の種を根絶やしにするので、夏に雑草が生えず除草の必要がない。有畜農業とは家畜を飼うということで、それによって例えば家畜の糞が肥料に使えます。肥料を買わなくても、農家の自前で肥料が手に入る。非常に経済的にも合理的ですし、除草の労働が必要ないので大変メリットがあります。

満洲で北海道農法を伝えるという話ですが、もともとある満洲のやり方、中国人の農家のやり方は、満洲在来農法と言っています。その特徴を簡単に述べると、農具は使うのですが、浅く耕します。プラウのように馬で牽いて土を反転させることはしません。除草労働を人手を使って行います。夏になると何百人という人海戦術で草取りを行い、それが一番大変だと言われます。肥料については、ほとんど使いません。満洲の土地はもともと肥沃で、肥料をあまり使わなくても作物ができるので、日本ほど肥料を使わない。これらの点が満洲在来農法の特徴です。

日本から行った開拓団の農家たちは、畑は中国の畑、気候も中国ですから、中国人のやり方を真似しないと作物が穫れないわけです。日本の米作りを満洲でやろうと思っても、すぐには上手くいきません。ですから日本の移民たちも、最初のうちは見よう見真似で周りの中国人のやり方を真似した満洲在来農法でした。除草労働のときは、何百人という労働者が必要で、開拓団の村に中国人の労働者がたくさん雇われて働いた。日本人農家が中国人の真似をしているというのがこの頃問題になっていて、何とか日本独自の、中国より優れた農業をするべきだということで北海道農法が注目されたわけです。

例えば実験場ができ、北海道から技術を持った農家が行きました。かなりの技術力を持っており、北海道から馬と牛、農具を一式持って行きます。自分の普段使っているものを持参して、満洲で実験をしたら成功しました。また、チチハルは満洲でも北の方になりますが、更に北にある北学田というところで、ここは開拓農民が北海道農法を試み、みんな成功しました。実験的な北海道農法が成功していったので、開拓民営農指導要領（1941年1月）において満洲開拓団が北海道農法（「改良農法」とよんでいた）を採用することが明記され、方針として決定されました。

玉真之介氏の研究の結論では、北海道農法が北海道から満洲に伝わり、ある程度定着したとされています。その証拠になっているのが、改良農法による農耕地比率の表です。北海道農法という言葉は北海道だけで通用するというイメージを持たれてしまったので、満洲に行ってから改良農法と言葉を変えています。満洲国政府や満洲国の技術者たちは普及に当たり、名称を改良農法としましたが、中身は北海道農法です。改良農法の実施率は、

1941年で21.2%でした。北海道農法で行うと方針が決まった初年度の普及率が21.2%、翌42年になると53.9%になります。これをもって玉氏は、北海道農法はある程度普及・定着したとしています。もう一つは、開拓団、日本人移民の1戸当たり耕作面積の推移を見ると、1940年に3つの開拓団では、それぞれ3.9町歩、3.0町歩、2.5町歩でした。北海道を含めた日本の平均は1町歩と言われるので、満洲に移民したお陰で3町歩前後の土地を耕作するようになったのです。

しかし、当初の方針では、日本人開拓民は1戸当たり10町歩（10ha）の土地を与えられ、それを耕すとありました。中国人も非常に大きな面積なので、彼らから見て馬鹿にされないように10町歩耕し、優れた農業を示す。中国人の模範たるような優れた農業を行うことが方針でした。3町歩というのは中国人に比べ決して大きくないので、日本からやって来て大した土地も耕せない、小規模だと馬鹿にされるわけです。ですからこれは望ましくない。ところが、昭和16年、改良農法導入を決定して以降、4.4、5.5、7.0…と増えています。最終的に昭和18・19年に10町歩前後に達しているところもあります。これが玉氏の論文の一つの結論で、北海道農法を普及したところ開拓団の耕作面積が増えていき、当初目標の10町歩が、データは少ないですが、この3つの村では達成されていると結論づけています。

これに対して、今井良一氏による批判があります。最近発表された論文で、北学田はモデルケースではあるが、1943年度の資料を見ると、結局在来農法に戻っている。基本は在来農法で、一部畜力用のプラウを使っているに過ぎない。だから北海道農法に切り替わっているとは言えないとしています。北海道農法が普及したとは言えないという批判でした。

今日の課題として、玉真之介氏と今井良一氏とで、北海道農法が定着したか否かについて意見が分かれています。これはどのように見ればいいのか。また、北海道の人たちが満洲に関わったのが、北海道農法の普及過程です。これははっきりしているのですが、具体的にどのような関わり方をしたのかを見ていきたいと思います。

1 北海道農業の貢献

北海道農業の貢献についてですが、須田政美という人は、満洲拓植公社で働いていた北海道出身の人で、彼が自分と同じように北海道から満洲に渡ってきた人を、片っ端から名前を挙げています。この文章に、「弥栄の小田氏、瑞穂村の三谷氏」とあります。この二人は北海道の農民です。三谷という人は今、西区の発寒に三谷農場というのがありますが、そこの人で琴似村出身です。小田という人も北海道から渡った農民です。この人

たちは実験農場で成功しました。それから、「同年開拓総局及び満拓内部で」とあります。開拓総局は満洲国政府の一部門です。満拓とは満洲拓植公社という会社です。拓植の植の字は、普通は北海道拓殖銀行とか、北海道拓殖計画のように殖を使いますが、満洲拓植公社だけは木へんの植を使います。専門の研究者もよく間違えるのですが、理由は分かりません。これが開拓地の獲得や移民たちの指導にあたる会社です。

次に、開拓総局に松野伝（つとう）という技師が北海道から行っています。安田という人も北海道から行った人で、この2人は北海道農法の紹介のためあちこちで講演をしたり、本や雑誌記事を書いたり大活躍をした人たちです。次に「私の知る限りでも樋口、庄司、我孫子、川辺、和田…」とあり、この人たちも北海道から行った人たちです。それぞれ満洲国の役所関係で働き、北海道農法の普及に努めたそうです。「公社関係」とは満洲拓植公社ですが、ここでは「出納陽一、山本武四郎、古川博など」とあります。その数だけでも200人と、かなりの数の技師・役人たちが北海道から満洲に移りました。出納陽一について補足すると、厚別区上野幌に雪印のスケート場があります。種苗や花を売っているところがあり、その一角に出納邸というこの人の実家が文化財として残っています。あまり知られておらず、厚別区の住民以外はあまり知らないのですが、酪農家出身で、雪印を作ったときに関わった人です。この人が牛を連れて満洲に渡り、このときは技師として公社で働いていました。このように、役人や技師が大量に北海道から満洲へ行きました。今でも、安田とか松野という人たちはたくさん本を書いているので、図書館で古い本を探すとその人たちの活動ぶりがよく分かります。

実験農家の一人、琴似町出身の三谷正太郎ですが、この人も北海道から農具や乳牛を持って行きました。実は、先に満洲に来た人たちから大分反対されています。北海道式はどうも満洲には合わないと言われます。北海道からわざわざプラウを持って行ったのですが、土質が違うので満洲では無理だ、北満地帯は犁丈（りじょう）、中国式に発音するとリージャンといいますので、リージャン農法でなければいけない。リージャンは満洲の短い鋤で浅く耕す。これは雑草を根こそぎ取れないので、除草労働が必要になりますが、リージャン農法の方がいいと言われます。「加藤先生等からも非常にお叱りを受けた」という意味は、加藤完治は農民ではありませんが東大を出て農民道場を自分で作り、農民たちを集めて訓練することを職業にしていました。加藤完治が満洲移民を最初に言い出し、彼が自分の教え子たちに満洲行きを勧めて始まります。この人は一種独特の農本主義者で、精神主義者です。彼はどういう農法が満洲に合っているかとか、合理的かという議論を嫌い、北海道のやり方は金儲け主義でけしからん、アメリカに近くてけしからんと考えています。それで北海道農法には一貫して反対していました。三谷正太郎も、満洲に来てみたら北海

道農法は合わないと言われたり、反対されたりしました。しかし、実験をした人たちは大方成功し、北海道農法が徐々に認識されていきました。

レジュメに「北海道農業人の開拓農業観－鈴木重光の場合」とありますが、詳しく説明します。鈴木重光は北海道の元種畜場技師で、この本を刊行した時には興農公社の技師と書いてあります。興農公社は満洲国にある農協のような組織です。鈴木重光の肩書きについて、満洲で講演を行った記録から紹介します。この講演の冒頭、彼は自己紹介の中で「私は約1ヵ月半ばかり前に初めて満洲に参りまして、2・3日前までハルビン以北を主に開拓団を回ったのであります。私は皆さんのように（多分満洲国の政府関係者や技師たちが聴衆におり、そこに向かって講演しています）、学問のある者ではなく、本当の百姓であります。私は今日まで30年間百姓をやってきた」と言っています。肩書きに種畜場技師とありますが、この人は技師もやったのでしょうか、基本的に農民なのです。北海道の場合、農業者がインテリなので、講演を行って農法等の説明ができますし、学者や技術者を相手に話すことができます。この人も自分は30年やってきた百姓だと言っていますが、一応技師の経験もあり、視察を終えた後に満洲国の興農公社に行きます。

この人の講演は満洲開拓の本質を鋭く突いていると思うので紹介しておきます。「開拓団の団員の農業についてお話ししたいと思います。開拓団はお話を聞きますと現在約90くらいある。そして1団200人から300人の団員であるということであります。私の伺ったのは10ヵ所くらいあるかないかというわけで、それを以って全般を知るのは少し誤っているのではないかと思います。しかしだいたい行き方が同じようであるところを見ると、大した誤りではない」としています。次から批判が始まります。「資本金約60万から100万円も使っている。その中の3分の1が中央施設に使われていて、事務所、学校、病院、農事試験場、種畜場、農産加工場などを造っている」。開拓団は一つの村を作るので、村役場や農協、工場など公共施設を造りたがる。「購買販売の施設などに相当の金額を使っている。3分の1の金額が団員の元に渡っている」。団員たちはお金が配分されると、住宅に使ってしまう。日本では貧しかった人が多いので、お金が手に入ると立派な家を新築する。それは悪くはないが、農業の方にさっぱりお金を使っていないと言っています。

次に言っているのが農業の実態で、「例えば自分の腕の代わりになる動物（家畜）は、1軒に1頭も行き渡っていない」「農具はというと、リージャンや鍬、鎌ぐらいは入っているが…」これは中国人が使っているような小さい農具は多少入っているが、彼が考えている、本当に土地を耕す北海道式の農具は揃っていない。次に団員はどうかというと、「団員の中でも最も頭の良い思考力のある、実力のある人間はみんな中央に引っ張り寄せて、お前も来い、お前も来いという有様である。その人数は少ないところで2割5分、多いと

ころでは3割だ」。これは、中央に公共施設をたくさん造ったので、役場の事務職員、農協の職員、販売所、加工場、試験場によく働く人をどんどんスカウトしてしまい、せっかく男手があるのにそこで働いている。そうすると、引っ張られなかった人たちが農業をやっている。その人たちの実態は、前身を調べてみると、内地で床屋をしていた、あるいは自転車屋、保険の外交員をやっていたという人が多い。農業をしていた人もいるが、内地で5、6反の水田を作っていた程度。これは当然、本州で土地が狭いから満洲に移民したのですから、日本の中でもかなり貧しく土地が狭い農家です。ですから農業経験もさほど豊富ではない。鈴木氏は相当有力な技術のある農民のようで、1ヵ月半の視察でかなり正確に開拓団の実態を見抜いていました。それを講演の場で率直に語っています。

「隣の満人は秩序整然と上手くやっているのだから、その見習いをやっているのが現在の状態だ」。中国人の農民のやり方を真似するのが精一杯、そして「自分でやってみたことと満人のやっているのを比較してみると、彼らは生まれながらにして百姓だ。自分は満洲に渡ってからの百姓だ。この間の差が大きい」。結局、「満人を雇ってきたらどうかと言って、雇ってくると上手くいく。結局、雇って農業をやるか、彼らに耕作をさせるかということになり、満人にやらせるのが一番上手くいく」。これは少し言葉を補うと、満人を雇ってというのは、中国人の農民を農業労働者として雇うというケースで、この場合は開拓団の日本人移民は自作農とみなされます。中国人を雇って働かせても、あくまでもその田圃・畑は日本人農家のものですから、その人が自分の経営責任において人を雇っています。次の「彼らに耕作をさせる」という意味は、小作に出すということです。日本人開拓団が所有している土地を手放して、中国人の農家に貸す。この場合は日本人開拓移民は地主になり、中国人農家は小作になります。要は、満洲開拓団の在来農法の問題というのは、鈴木氏が言っている日本人の移民は農業ができない、基本的に能力がない。10町歩という土地はすでに約束されています。何とか3町歩くらいは自作地としてやっているが、実態を見れば働いているのは中国人。自作地であっても、実は中国人が労働者として働いている。それ以外の土地は、所有権だけ持っているが小作に出すなどして、中国人が経営を仕切っている。小作人は経営者ですから、借りている土地については自己の責任で農業経営をしている。この開拓団の地主化、あるいは労働者として中国人を雇っていることがこの頃の問題となっていて、これを解決するために北海道農法の導入が主張されているわけです。

この鈴木重光という人は、非常に精力的に視察をしました。移動する汽車の中で、自分の隣に汚い格好をした中国人が来た。話をしたところ、その人のことを苦力（クーリー）と見ました。これは中国社会には大勢いる、日雇い労働者、肉体労働者ですが、満洲では除草労働のときなど大量に労働者が必要になり、その際にクーリーを使います。彼は

汚い身なりの中国人なので、クーリーだと思ったのですが、話をしていくと地主だったそうです。当時の日本人は、中国に行き、中国人を見て職業を区別するときに、地主とクーリーに分ける傾向がありました。地主というのは、本当に地主なのかどうか。クーリーというのは、本当にクーリーなのかどうかはあとでまたお話しします。隣に来た人は地主で、「70町歩ほどの土地を所有しているが、今回、満拓の方に差し出すことになり、今、地券を持って伺い、その帰りだと言う」。70haを持った地主だが、満洲拓植公社に差し出すことになったので、地券を持って行ってその帰りである。これは、満洲開拓のための、土地買収の方法なのです。満洲拓植公社は、お金を用意し、指定した土地の地主たちに地券を持ってこさせます。地権者たちは満洲拓植公社か役所に地券を届け、自分の土地を売ります。安いですが、土地代金は払われます。このように半ば強制的な土地買収をし、日本人開拓団用地を揃えたのです。この人は自分の土地が当たったので、地券を持っていった帰りということなのです。

地主の話を受けて鈴木は、70町歩持っており、35町歩を自分で作っているのなら、馬鈴薯などを作れば儲かるのではないかと言った。ここで分かるのは、この中国人地主という人は70町歩所有していて、そのうち35町歩を自作している。35haの自作というのは、1人の人間ではありえず、労働者を使っています。この人の実態は、35haを経営している農場主、農業経営者で、恐らくものすごい数の労働者を使っていると思います。むしろアメリカなどの大農場のイメージの方が近いかもしれません。日本人は、中国人を見ると地主かクーリーに分けたがるのですが、実はこの人は農場主、農業経営者です。

この後2人の会話が続きませんが、「お前は日本人の百姓をどう思っているのかと訊いた」ところ、「朝鮮人の水田作りは上手だが、日本人の畑作りは全く下手だ」。鈴木は「非常に叩きつけられたような感じがした。私はそこで、あなたはもう4、5年見ていらっしやい。あなたが驚くような立派な農業を日本人はやるからと言ってみたところ、彼は笑いながら、いやそうではありません。5年も10年も経ったら、恐らく満人に近い農業をやるようになるだろうと言う」。この中国人の農場主は、5年10年経てば、ようやく中国人に追いつくだろうと言って笑っている。鈴木氏はその話を聞いてショックを受けたが、最後の部分を見ると、「私の今見てきた目が、彼、満農の見方と同一なのだ」としています。実は鈴木氏もそう思っている。開拓団はあまりにもレベルが低く、農業はまともにできないと思っていたところに、中国人からも同意見を聞いてしまった。これはまさに中国人に馬鹿にされていると実感するわけです。

この鈴木重光という人は基本的に農民なので、満洲開拓の問題点をかなりの確に見抜いています。これは何よりも、彼自身が北海道開拓の経験があったからだと思われます。そ

もそも満洲開拓という言葉は、政策的に無理に作った言葉です。もともとは、満洲移民と言っていた。実際に移民した人たちが、移民という言葉に蔑んだイメージがあり、貧しいから日本で食っていけず移民になったと言われたくないと言い出します。1939年に政策を立て直す際に、満洲移民という言葉は使わず全て開拓民、満洲移民政策は満洲開拓政策と、公文書では全て言い換えました。1939年12月以降、公式文書からは満洲移民という言葉は消え、全部開拓民になっています。ところが、実際に鈴木が見たように、移民の実態は先述したとおりです。これに対して北海道開拓はまさに開拓をしていました。例えば開拓の際、切り株や根がたくさんある森の状態の写真が数多く残っています。開拓はそれを伐るところから始まりますが、満洲開拓も写真はたくさんありますが、木を伐っている写真はまずありません。満洲移民の写真は、トラクターや馬を使って畑を耕し、機械等を使っている写真はたくさんあり、平坦な畑を耕している写真ばかりです。家を建築している写真はありますが、木を伐り倒す写真はほとんどなく、北海道開拓とは違うと考えられます。

1941年1月、改良農法を行うことが決まり、それ以降の幾つかの試みを紹介します。まず、北海道から実験農家を先に送ってあった。これは38年くらいからですが、41年以降は満洲から満洲移民の人たちを北海道に留学させ、北海道の実習場で訓練することを始めています。北海道出身ではない人を、北海道で勉強させるのです。プラウを始めとする農具についても、北海道の農具メーカーしか作れないものもありました。中国にあるメーカーは中国式のものは作るのですが、北海道式農具は作れない。それで北海道から農具メーカーを移駐させました。1941年度に北海道から満洲に移駐した農機具メーカー一覧を資料に示しました。この事業も継続して行い、かなりの数の農機具メーカーが満洲に移りました。このように北海道と満洲は関わりを持っていました。

北海道からどれくらいの数の農家が行ったのか、数字を補足します。資料によると北海道（樺太を含みます）から満洲に渡ったのは、1941年12月末現在で1,098戸です。人数は2,387人以上というのは、戸数だけ分かって人数が分からない開拓団が幾つかあり、これ以上は確実ということです。恐らく家族数なので、3,000から4,000くらいになると思います。次に、別の資料で終戦時の数が分かります。終戦時、北海道・樺太出身で満洲に開拓団として行った人数は、4,195人いました。これは家族を含み、子供や妻も含んでいます。終戦時に満洲に移民していた人が4,195人、1953年までに無事に帰った人は2,354人、45年から53年の8年間で亡くなった人は、1,067人、これは53年の時点で死亡したことを確認しているので、ソ連軍の進駐の際、例えば集団自決をした人もいたと思われますし、その後、終戦の混乱は無事に生き延びたが、その後に死亡した人もいる。この8年間で1,067

人が死亡しています。生存は確かだが未帰還の人は774人です。これが北海道・樺太の満洲開拓の実績です。やはり人数で見ても、戸数で見ても決して少なくはない。土地が広い北海道から、なぜわざわざ満洲に行ったのかは、先ほどから述べている北海道農法を普及するためというのが、かなり大きな理由だと考えられます。

幾つかの農家の実践を紹介しますと、八紘村というところがあって、これは月寒に八紘学園というのがありますが、そこの人たちが作った開拓団です。そこで北海道式の農業を行いました。次に先ほど名前が出た小田保太郎ですが、この人は北海道出身の酪農経験がある農家で、実験農家として特別な役割を担いました。実験農家の人は何をしたかと言うと、「満拓（満洲拓植公社）から入れたプラウがどうも反転が悪いとか、岩城商店から購入したプラウはあまり反転が良くないとかいうような、反転の具合に関する苦情が相当あった」。開拓団の人からはプラウを使うと上手くいかないと言われる。北海道出身者が使うと上手くいく。「ちょうどハルピンに参ったときに、今、鏡泊湖の団長をされている岩崎さんが訓練所におられ、色々農具の話をされました」。このように他の開拓団の団長などに農具の使い方をアドバイスしています。

「それで私が農具の購入に北海道へ参りましたときも」、実験農家の人は北海道と満洲を行ったり来たりしています。「ちょうどその頃、道庁の方へ千振の団長さんからもプラウが欲しいと言ってきておりました。道庁の小森さんが私に、そういう手紙が来ておりますから持って行ってもらいたいと言った」。千振は有名な開拓団で、その団長が道庁にプラウを買いたいと言ってきており、この人がお世話をしています。小田保太郎はプラウと一緒に来てくれと言われ、使い方を教えました。小田は弥栄の開拓団に所属していますが、自分の所属する開拓団以外にも出かけて行き農具指導をしている様子がよく分かります。

II 増産至上主義のもたらした矛盾

次に、増産至上主義のもたらした矛盾に入ります。「はじめに」のところで開拓団の作付面積は増えたのか、北海道農法が普及したかどうかという議論があり、結果として、北海道農法が普及したので、開拓団1戸当たりの耕作面積が増えたという、玉真之介氏の見解を紹介しました。玉氏が根拠にした元の資料を見ますと、4つの開拓団の概況の中に、1戸当たり営農面積というものが確かにありました。ただし、その数字は、いつ誰が作成したものか分からないのです。引用されている文献は1970年代に出された本なのですが、元資料が何なのかよく分からないのです。たまたま4つの開拓団だけを玉氏が扱っていましたが、それ以外の開拓団は自作地と貸付地を区分し、その本に書いていました。4つの開拓団は、自作地と貸付地の区分がありません。そこで少し疑いを持ち、開拓団の営

農面積が増えたと言いますが、ひょっとしたら開拓団の日本人農家が自作している田、畑と、中国人に貸して小作に出した田、畑が混在しているのではないかという疑問を抱きました。そこで、作付面積が増えた実態は何なのかについて、表1を見て下さい。1940年の段階で、開拓団の平均値は自作地が6.47町歩、貸付地が5.14町歩、合わせて11町8反になります。ここで言う貸付地は日本人の開拓団が誰かに貸しているもので、小作地のことです。自作地が6町歩、小作地が5町歩、合わせて11町歩、これが作付面積です。つまり、元のデータを作った人の意識は、どれだけ土地を有効に田、畑として使っているかが問題なので、誰がやっているかは二次なのです。ですから、日本人開拓団の作付面積が10町歩に達したと言っていますが、実は半分弱は小作に出しているわけです。そうすると先ほどの話に戻れば、1940年頃、開拓団の土地がだいたい10町歩前後に達しますが、小作地（貸付地）を含んでいると見た方が妥当だと思います。

このように、北海道農法が普及したかどうかという点になると、普及して日本人農家が北海道のように、1軒の農家で10ha作るということにはなっていない。見かけ上、10町歩あるというのも、実は中国人に小作に出している分を含んでいる可能性が大きいと思います。

前述のように、開拓団の作付面積は年々増加するのが一般的でした。開拓団の作付面積となる以前は、その土地はどのような状態だったのでしょうか。満洲開拓で土地買収を行ったのは、満洲拓植公社と満洲国開拓総局でした。満洲拓植公社は会社で、開拓総局は役所です。両者は1940年頃に、満洲国全土で約2,000万haの土地を獲得していました。日本の農地面積がほぼ600万haと言われますから、3倍強が40年の時点で満洲拓植公社と開拓総局によって買い占められていました。この中から、開拓団に順次分譲された。開拓団は最初、小さい面積からスタートし、徐々に面積を増やしていきました。開拓団が入植するまで買い占めた土地はどうなっているかという、満洲拓植公社が地元の中国人に小作させるケースが多かった。従って、開拓団が来るまでは満洲拓植公社の小作地で、その中国人は最初から住んでいる人なので、その土地を売った人である可能性があります。地券を差し出し買収に応じ、土地の所有権は失うがそこに住んでいるわけですから、満拓公社が管理人としてその土地を貸した。元は自作農だった人が、立場が変わって小作農になるが、引き続き自分の村に住んでいた。そこに開拓団がやって来ます。開拓団はだんだんと経営地を増やすので、満洲拓植公社の小作地から開拓団の所有地に替わります。それが先ほど触れた、開拓団作付面積の増加です。耕地でないところが耕地になったり、開墾したわけではありません。もともと中国人の畑を、満洲拓植公社が買い取り、それが開拓団に渡ったということです。

開拓と増産の矛盾に話を戻すと、1943年12月に篤農家座談会が行われます。その出席者は、開拓団に入っている農家の人たちですが、北海道出身者は笛田道雄1人だけで、あとは本州の人です。そして、篤農、すなわち非常に優れた農家とされた人が呼ばれて座談会を行っています。北海道の笛田以外の全員が改良農法をしています。笛田という人は、北海道農法5年間で止めています。基本的に北海道農法、改良農法が、篤農家と言われるような優れた農家には普及しており、本州出身の人でも成功者がいるということがわかります。

この座談会で注目すべきは、北海道農法を行うか否かはもうメインテーマではなくなっている、ということです。43年という年は、太平洋戦争が始まって、日本国内は大変な物・食糧不足です。満洲国は農地が多いので、日本も含めた帝国内の食糧増産基地に位置づけられています。満洲で米や小麦、大豆を作り、日本にも供給してほしい。ですから満洲農業の位置づけが、日本に住んでいる日本人のためにも非常に重要になっていたので。座談会は、増産をいかに実現するかに話が収斂していきます。主催者側は満洲拓植公社や開拓総局という役所関係ですが、当局側から大胆な発言がなされます。例えば、「来年度あたりからある程度雇用労力を使用して、増産を行う。労力雇用の見込みが立たない場合は、やむを得ませんから団内の余剰面積はこれを団内の原住民（中国人のこと）に耕作させてもよい」「クーリーを要求しても来なかった」、これは、先ほどの改良農法があまり普及していないという証拠です。除草労働が大変なので、クーリーをたくさん雇うことを、日本人の開拓団がまだ行っている。クーリーを要求しても来なかったので、収穫のときにそれが響いて減収したと報告されています。

また、中村孝二郎という開拓研究所の所長の発言ですが、「そこで当局が心配してくれる労力が、熟練労力か不熟練労力かということもまた問題になります。不熟練労働者、例えば協和義勇奉公隊員、学生、都会の俸給生活者」、この頃は日本からの学生等が、満洲国で奉公隊として応援に行っています。そういう者が来るが、「農事の経験がない人が応援に来て除草作業をしたので、草を残して作物を取ってしまうようなことがあり得るわけです」。上原時敬という篤農家は、「私の方にもそういう経験があります。あるとき奉仕隊が来てくれて、応援してくれたが、結果は少しも有難くなかった」。そこでこの上原が言っているのは、「原住満農の労力利用について、政府の方針として県の方へ指示されたとしたならば、県としての今までの方針は中止されると思いますから」とあります。満洲国の方針は、開拓団の入った地域に住んでる中国人農民は、そのまま住んでいてもいいが、少し余っている場合は、中国人を北満のもっと奥に移住させます。中国人の満洲内の移住です。この上原氏の意見は、開拓団は人手が足りなくて困っている、日本から学生が来た

ところで、間違ったことをして困る、元から住んでいる中国人農家の人たちに、引き続き村にいてほしい。中国人を奥地に移住させるという政策の変更を求めています。このときは満洲国政府も、中国人農民の方がよく働くことが分かっているので、国境地帯に移住させる政策を見直しています。

「戦争が済んでから理想的経営法に戻り、土地を肥沃にして植林もやらなければなりません」これが中村所長の発言で、農業技術者か農学者なのでしょうが、戦争中は略奪農法でいいと言っているのです。これまでは、満洲は略奪農法でけしからんということで、北海道農法を進めてきたのですが、43年の増産が至上命令なので、今年・来年が問題だ、将来のことを心配している余裕はない。ですから、将来のことは戦争が終わってから考えればよいということで、41年とは話が大幅変わってきています。

結局、増産をするために日本人の開拓民は、さっぱり力にならないということなのです。仮に日本人が頑張れるとしたら、中国人を雇ってやってもらうしかない。もっと言えば、満洲国全体では中国人農家が圧倒的多数なので、中国人農家に頑張ってもらうしか増産の方法がない。それに気付いた満洲国の技術者や官僚たちは、改めて在来農法を見直します。北海道から行った技術者たちは、満洲農法がいかに遅れているかと言ってきました。北海道は進んでいるのに、満洲在来農法は遅れている。ところが、1943年から日滿農政研究会という、日本人が作っている農業研究団体で、在来農法に関する研究を始めました。43年から始めたのは増産をするために中国人に頑張ってもらうしかない、在来農法をもう一度見直す機運が高まっていたからでしょう。

まず、日本人は中国に行って農民を見ると、地主かクーリーに分けたがります。土地を持っているのは地主であり、土地を持たず働いている人はクーリーです。実際には、43年になってようやく満洲在来農法の研究調査をしてみると、地主と呼ばれていた人は実は農業経営者であり、何百人、何千人の労働者の管理を緻密に行っている。労働者も、本当のクーリーもいますが、色々な種類の人が出て、各自技術が違うわけです。農業労働者それぞれに得意な技術があり、それに応じて経営者が仕事の配置を行っています。これは一種の工場のようなもので、非常に近代的な労務管理をして、大きな面積を集团的に経営しています。このことが43年くらいの調査でようやく分かってきて、調査を行った人は、満洲在来農法は決して古臭くはないし、かなり進歩発展していると見直します。ですから、北海道農法を伝えようとして、北海道からたくさんの人が行ったことは事実ですが、結論として満洲国、中国人たちに何か伝わったかということ、むしろ逆に、在来農法・中国式の農業には非常に合理的な面があることに、日本人が気がついたというのが、戦争時期の最後の状況ではないかと思えます。

以上でこのお話を終わります。北海道の昭和期・戦前期の農業の特徴と、満洲開拓の建前と実態について、北海道の農家の目を通して見たところ、このようになるのではないかというお話でした。

表1 開拓団の耕地利用状況（1戸当たり） 単位：町

開拓団名	宅地	自作地	貸付地	計
第一次弥栄	0.4	6.8	3.71	10.97
第二次千振	0.22	11.62	6.55	18.39
第三次瑞穂	—	4.87	17.11	21.98
第五次永安	0.6	5.6	6.2	12.4
第六次熊本	0.11	6.09	2.55	8.75
第六次東北	—	2.22	1.77	3.99
第六次龍爪	0.2	8.7	0.84	9.74
集合・水曲柳	0.19	5.82	2.37	8.38
平均	0.22	6.47	5.14	11.83

資料 喜多一雄『満洲開拓論』明文堂、1944年

※この講演は、2010年1月20日、札幌大学経済学部附属地域経済研究所が主催して行われた第2回講演会の記録である。